様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１４３２９

研究課題名（和文）学校ボランティアにおける大学生の学習プロセスに基づくリフレクション手法の開発

研究課題名（英文）Development of a reflection method based on the learning process of university students in school volunteer

研究代表者
中村　駿（Nakamura, Shun）

武蔵野大学・教育学部・講師

研究者番号：６０８０４５０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、学校ボランティア活動における大学生のリフレクションの様相を明らかにし、その結果に基づきリフレクションの手法を開発することが目的である。結果として、省察の対象や深さには学生の個人差が見られ、深い省察は1学期分の活動では容易でないことが示された。また、省察の対象が多側面で深いレベルの省察が生じた学生の特徴として、出来事に直面した際に、児童の実態や発言に着目しながら問題同定や働きかけをしていることが示された。省察には個人差が見られ、学生の中には省察の対象や深さが限定的となる場合もあり、支援の必要性が示唆された。これらの結果と文献レビューに基づき、支援手法を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通してリフレクションの問題点や新たな手法の可能性を示唆した点は、今後のボランティア活動の改善はもちろん、リフレクションを重視するさまざまな専門職教育（例えば教師、看護師、ソーシャルワーカー等）の向上に寄与する。さまざまな専門家教育においてリフレクションが実施されているが、そこでの学びの質が十分に検討されおらず、本研究で得られたリフレクションの具体的な問題点や、高次レベルのリフレクションができた学生の特徴は、今後の専門家教育において効果的なリフレクションを提供するための１つの手がかりになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore how university students reflect on school volunteer activities and to develop a reflection method based on the results. The results showed that there were individual differences among students in terms of the subject matter and depth of reflection, and that deep reflection was not easy to achieve in a single semester's worth of activities. In addition, as a characteristic of students whose reflection was multifaceted and a deep level of reflection occurred, it was shown that they identified the problem and worked on it while paying attention to the actual situation and statements of the children when they were confronted with the event. Individual differences in reflection were observed, and the object and depth of reflection for some students were limited, suggesting the need for support. Based on these results and a review of the literature, supportive techniques were proposed.

研究分野：教育工学

キーワード：リフレクション　大学生　小学校ボランティア　省察の支援　大学教育　教師教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

教師教育において職場での学び（workplace learning）が世界的に注目され，教員養成では講義を受けて教職に必要な知識やスキルを習得するだけでなく，学校現場を訪れ実践することも重要視されるようになった（Korthagen 2001）．そのねらいは，学び続ける教師，すなわち，実践経験の中から自ら問題を設定し，探究し続けることのできる教師を養成することにある．我が国の教員養成では，職場での学びの方法として学校ボランティアがあり，大学が小中学校等と提携し，授業づくりの支援，子どもの学習支援，学習環境の整備，雑務等，教師の仕事を周辺的に体験し，学ぶための場を提供している．こうした学校ボランティアが単なるマンパワーの提供に留まらず，大学生にとって教育的意義のある活動とするためには，リフレクション(reflection)，すなわち，現場の実践経験を基に，自身の見方・実践のあり方を批判的に思考することが重要とされている．主な方法として，振り返りの日誌やカンファレンスが挙げられ，大学生は，自身の実践を言語化したり，大学教員や仲間と実践を検討し合ったりすることを通して，教育実践を問い直す機会を得ている．

しかしながら，近年の研究によれば，単に体験的活動とリフレクションの機会を提供するだけでは大学生が十分に学ぶことができないことも多く指摘されている．例えば，Abou Baker El-Dib（2007）は，大学生 100 名による教育実習のレポートを対象として，授業実践の各ステップ（問題の記述・計画・実践・振り返り）におけるリフレクションの深さを分析している．その結果，半分以上の大学生がすべてのステップにおいて低次レベルのリフレクション，すなわち，授業における問題を複数の視点から検討しようとせず，近視眼的に解決しようとする傾向が明らかとなっている．それに対し，大学生に単独でリフレクションさせることの限界を主張し，仲間やメンターとリフレクションを試みた研究も多く見られるが，そうした方法であっても，リフレクションが十分に機能していないことが報告されている．例えば，Gelfuso et al.（2014）は，若手の教師や教育実習生が生産的に学ぶためには知識ある他者（knowledgeable others）の存在が重要であると主張し，教育実習時の授業ビデオを活用して，大学生に教科内容を専門とする大学教員とリフレクションを実施させている．その結果，大学教員の支援があっても，大学生は授業や学習に関する見方をほとんど変えなかったことが報告されている．このように大学生のリフレクションを支援する取り組みが数多く行われているが，必ずしも深い学びを促進するとは限らないと考えられる．

こうした現状について，先行研究では，実践者の学習プロセスを考慮せずにリフレクション手法を開発してきたことが問題の原因として考えられる．近年の教師教育では，学習科学の台頭によって，教師の学習そのものを研究対象とする重要性が指摘されており，教師の学習プロセスを解明することが支援手法の開発に役立つとされている（Russ et al. 2016）．したがって，学校ボランティアにおける大学生の学習プロセスを解明することが，リフレクション手法を開発するための手がかりになると考え，本研究の着想に至った．

Lee（2005）は，教育実習における学習に関係する要素として，大学生の個人特性，学校の文脈（担任教師の特性や学級の状況等），各リフレクション手法の特性（書くこと・話すこと）を挙げている．例えば，担任教師の授業法やアドバイスの仕方によって大学生の学びが左右されることや，実践を書く方法と話し合う方法のリフレクションでは学習内容の質が異なることが明らかにされている．Lee の研究は教育実習を対象としているが，上記の要素は学校ボランティアに共通する要素であるため，援用可能であると考えられる．一方で Lee は，学習成果と要素の関係に注目しており，学習のプロセスにおいて諸要素がどのように促進あるいは阻害するかについて十分に扱っていない．

## ２．研究の目的

以上の背景を踏まえて，本研究では２つの目的を設定した．

（1）ボランティアの活動記録（振り返りレポート・カンファレンスの会話記録・実践のビデオ記録）を収集し，質的データ分析を通してボランティア活動における大学生の学習プロセスを総合的に検討する（研究１）

（2）研究１の結果を踏まえて，先行研究のリフレクション手法を参照しながら，大学生の学習プロセスに基づくリフレクション手法を開発する（研究２）

## ３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために，本研究では４つの研究課題に取り組むこととした．

（1）小学校ボランティアの活動記録の収集
（2）リフレクション研究の文献レビュー
（3）ボランティア活動における学生の学習プロセスの分析
（4）リフレクション手法の試案

４．研究成果

本研究では，以下の２つの成果が得られた．

(1)リフレクション研究の文献レビュー

教師教育において，リフレクションは広く用いられているが，その概念的定義が十分に明確化されていない．そこで，ショーンの著書をレビューし，概念の整理を行なった．その結果，主なリフレクション概念には，「行為の中の知（knowing-in-action）」「行為の中の省察（reflection-in-action）」「行為についての省察（reflection on action）」の３つの概念があることが示された．特にショーンは，省察的実践家の専門性として「行為の中の省察」を中心に据えていることが明らかとなった．ショーンの文献に基づき，本研究では，教師教育における行為の中の省察のプロセスを以下の４つのフェーズで整理した．すなわち，①教師と教室環境の相互作用：教師は発問を提示し，子どもから次々と意見を引き出していく，②予想外な状況への気づき：しかし，子どもから意見を集めていく中で，特定の子どもしか参加できていないことに気づき，想定していた状況ではないように感じる，③リフレーミング：その発問の聞き方が子どもにとって考えにくいのかもしれないと捉え直し，子どもの日常経験と結びつけた内容で聞いてみたらよいのではないかと考える，④フレーム実験：発問の内容を変えて提示してみたところ，多くの子どもが参加できるようになったため，日常経験と結びつけて発問を考えることが重要であると捉えるようになる．さらに，反省的実践家として成長し続けるために求められることを文献に基づき検討した結果，「見えること（seeing）」の重要性が示唆された．

次に，実際に教師教育において用いられているリフレクション手法について文献レビューを行った．レビューの結果，リフレクションの支援として多様な手法が見出された．具体的には，リフレクティブジャーナル，ケースメソッド，プロセスレコード，コティーチング，マイクロブログ，カード構造化法，授業カンファレンス，ナラティブ，授業ポートフォリオ，授業ビデオの活用，バーチャルリアリティの活用といった手法が挙げられた．また，リフレクションを促進するための方法として他者との対話とツールの活用に大別されるが，近年では両者を組み合わせる論文も多くなり，例えば海外では，インターネットの普及と高速化により，時間・空間を超えて授業ビデオを共有し，授業を他者と検討し合う方法が用いられている．このように手法の多様性が見られた一方で，研究成果を見ると課題があることも指摘されている．例えば 2010 年頃から，他者やツールの支援を提供しても，教師や実習生が授業を改善できなかったという報告も散見されるようになっている．その要因として，パーソナリティ，授業スキル，信念といった実践者個人の要素もあれば，教師教育者の指導力や学校文化といった環境側の要素があると言われている．したがって，今後はリフレクションが十分に機能するために整備すべき諸条件も視野に入れてリフレクションの手法を検討していく必要性が示唆された．

(2)ボランティア活動における省察プロセスの分析と支援手法の示唆

本研究では，小学校ボランティアにおける大学生の省察の様相を探ることを目的として，ボランティア１年目の振り返りレポートを分析した．振り返りレポートの記述をカテゴリーごとに分類し，低学年・中学年・高学年それぞれを担当する学生ごとに各カテゴリーの出現頻度を集計した（表）．その結果，児童理解のカテゴリーは全学年に共通して多く見られた．また，学年によってカテゴリーの出現頻度に大きな違いが見られなかったため，担当学年による省察の特徴は本研究においては示されなかった．そのため，児童理解の側面の省察についてはボランティア活動において安定して生じるものの，その他は学生個人によって異なることが示唆された．特筆すべき点として，中学年 B 学生・高学年 B 学生に関しては，他の学生と比べて，各カテゴリーの出現頻度に偏りが見られた．もちろんこの数値によって中学年 B 学生・高学年 B 学生の省察の質を問題視することは早計であるが，少なくとも学校ボランティアを通して多様な側面からの気づきを生じさせたいとコーディネーターが考えた場合には，支援の余地があると言える．

表　省察対象の量的比較

| | 低学年A学生 | 低学年B学生 | 中学年A学生 | 中学年B学生 | 高学年A学生 | 高学年B学生 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| トラブル対応 | 1（4%） | 0 | 5（13%） | 0 | 2（8%） | 4（17%） |
| 児童理解 | 14（54%） | 16（47%） | 15（39%） | 5（38%） | 10（38%） | 6（25%） |
| 学生と児童の関係 | 0 | 0 | 3（8%） | 1（8%） | 3（12%） | 0 |
| 児童同士の関係 | 3（12%） | 0 | 3（8%） | 0 | 3（12%） | 0 |
| 学生と教師の関係 | 0 | 1（3%） | 0 | 2（15%） | 1（4%） | 0 |
| 賞賛・励まし | 0 | 7（21%） | 2（5%） | 0 | 1（4%） | 0 |
| 注意・叱責 | 3（12%） | 2（6%） | 0 | 0 | 3（12%） | 5（21%） |
| なぐさめ・ケア | 2（8%） | 1（3%） | 5（13%） | 0 | 0 | 0 |
| 学習支援 | 1（4%） | 7（21%） | 4（11%） | 5（38%） | 3（12%） | 9（38%） |
| 自身の立場 | 2（8%） | 0 | 1（3%） | 0 | 0 | 0 |

また，各学生の振り返りレポートの記述を省察の深さのレベルによって分類した（図）．その結果，担当学年による顕著な差は見られず，深いレベルの省察を生じさせている学生もいれば，そうでない学生もいることが示された．また，深いレベルの省察が生起した学生数は限定的であり，その学生であっても全体に対する深いレベルの省察の割合が高くないことから，１学期分のボランティア活動の段階においては支援がない限り，すべての学生に深い省察を生起させることは容易ではないと考えられよう．なお，ほとんど想起レベルの振り返りをした学生は中学年 B 学生・高学年 B 学生であり，出来事をありのままに記述したり，教師から得られた助言をそのまま採用することを書いたりするケースが多く，出来事の関連や意味を吟味することはほとんど見られなかった．上記学生は，先述の省察対象のカテゴリーも限定的であったことから，省察に一定の支援が必要となる学生であると考えられる．

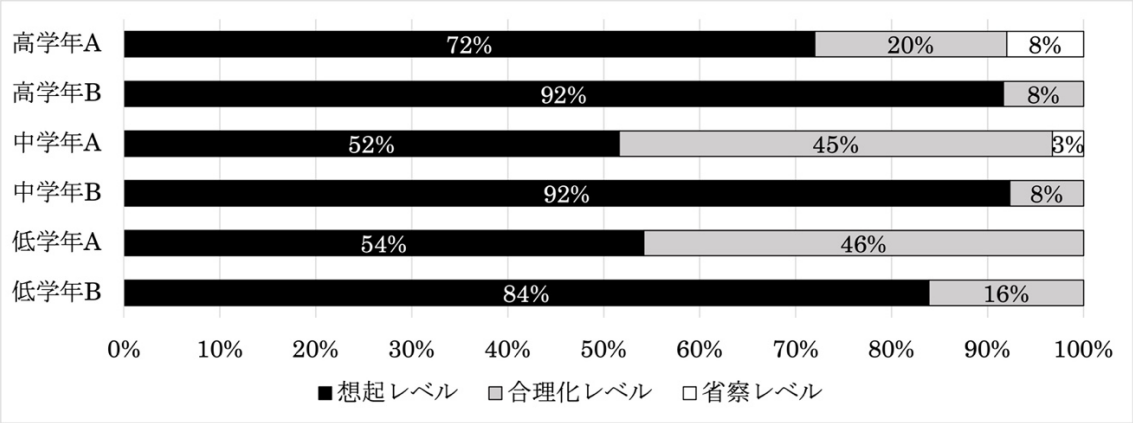


図　省察の深さの量的比較

省察の深さに違いが生じる要因を分析するために，振り返りの記述を質的に分析した結果，１つの特徴として，出来事に対する問題同定や働きかけをする上で，具体的な児童の実態や発言を手がかりにするかどうかに違いが見られた．具体的には，高学年 A の学生は「ずっと同じミスを繰り返してしまっていたようなので」「2 人が『先生とやりたい』とのってきたので」等の具体的な児童の実態や発言を踏まえて出来事を読み解き，児童への働きかけを記述していることがわかる．それに対して高学年 B の学生は「学級文庫にいく児童が全員本棚の前で何を読むのか悩んでいる」という事実の記述は冒頭で見られるが，それ以降は「本なんて一回選べば２・３週間はそれを読み続けるはず」「児童は本をまともに読んでいないのではないだろうか」のように自身の推論に基づき問題を同定し，「１０分くらいで読めてしまう薄い本があった方が良いのではないだろうか」と結論を下している．このように，ある出来事に直面した際に，事実や児童の発言に着目しながら問題同定や働きかけをするかどうかが両者の省察の違いであると考えられる．したがって，学生への支援としては，出来事に対して自身の推論を保留させることが重要で，本事例で言えば，児童が学級文庫で読む本に悩んでいるという問題の本質を探るために，児童の発言や様子に着目させるよう促すことが１つの方法として示唆されよう．

＜引用文献＞

Abou-Baker El-Dib, M. (2007) Levels of reflection in action research. An overview and an assessment tool. Teaching and Teacher Education, 23：24-35.

Korthagen, F. A. J., Kessels, J., Koster, B., Wubbels, T., & Lagerwerf, B. (2001). Linking practice and theory: The pedagogy of realistic teacher education. Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah. 武田信子（訳）（2012）教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ，学文社，東京

Gelfuso, A. & Dennis, D. V. (2014) Getting reflection off the page: The challenges of developing support structures for pre-service teacher reflection. Teaching and Teacher Education, 38: 1-11

Lee, H. (2005) Understanding and assessing preservice teachers' reflective thinking. Teaching and Teacher Education, 21(6): 699-715

Russ, R.S., Sherin, B.L., and Sherin.M.G.(2016) What Constitutes Teacher Learning? In Gitomer and Bell(Eds.), Handbook of Research on Teaching. American Educational Research Asssn, Washington, pp.391-438

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中村駿・浅田匡 | ４．巻<br>61 |
| ２．論文標題<br>省察的実践家に求められるリフレクションを考える | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>看護教育 | ６．最初と最後の頁<br>292-297 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>中村駿 |
| ２．発表標題<br>研究のことばで実践を探り、意味づける（シンポジウム：教師学研究の目指すところー実践者と若手研究者の対話ー） |
| ３．学会等名<br>日本教師学学会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中村駿 |
| ２．発表標題<br>学校ボランティアにおける大学生の学びに関する探索的研究 |
| ３．学会等名<br>日本教育工学会2022年春季全国大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中村駿 |
| ２．発表標題<br>教師教育におけるリフレクションの支援手法に関するレビュー |
| ３．学会等名<br>日本教育学会第79回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Shun Nakamura |
| ２．発表標題<br>Desk-top teaching simulation for capturing and promoting teachers’ reflection-in-action |
| ３．学会等名<br>International Conference: How People Learn ‘WAZA’: From the educational field of teaching and nursing（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Shun Nakamura, Tadashi Asada |
| ２．発表標題<br>Capturing Reflection-in-action Using Desk-top Teaching Simulation |
| ３．学会等名<br>13th World Association of Lesson Studies International Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中村駿・浅田匡（秋田喜代美・藤江康彦編） | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>東京図書 | ５．総ページ数<br>322 |
| ３．書名<br>これからの教師研究（第１章：教師はいかに授業を認知しているか?） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中村駿、河村美穂、油布佐和子、前川幸子、高橋知己、浅田匡、川村光、前田菜摘、井上典之（浅田匡・河村美穂編） | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>ミネルヴァ書房 | ５．総ページ数<br>232 |
| ３．書名<br>教師の学習と成長（教えることを学ぶ：反省的実践家になるとは　中村駿・浅田匡） | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|